

英語の不定詞に見られる 主格的機能の発達

山川喜久男

I 概 観

1 近代英語において、不定詞 (Infinitive) が統語上副詞的にあるいは形容詞的に従属的機能を果たす場合ばかりでなく、名詞的に他動詞の目的語となり、あるいは述語動詞の主語や名詞対等の叙述語 (Predicative) として用いられる場合にも、前置詞 *to* を伴った形式で表現されるのが普通である。この形式の不定詞が文中の動詞的または名詞的な機能単位に対して従属的に関係することは、*to* という前置詞の本質的機能を考えれば、異とするに足らない。しかし *to* を伴う不定詞が名詞的機能を果たすということは、*to* の無機化を示すものであり、英語の不定詞について歴史的省察の対象となるべき問題をはらんでいる。

ただ名詞的と言っても、不定詞が他動詞の目的語と見なされる場合は、その機能の発生は自動詞に対する本来の副詞的機能からの推移として了解される。たとえば、*a) He proceeds to speak* と *b) He chooses to speak* とを比較すれば、*a)* の *to speak* は自動詞 *proceeds* に対する目的方向の意を示す本来の副詞性を備えているが、*b)* の *to speak* は記述的には他動詞 *chooses* に対する目的語であると言われる。しかし二つの文における *to speak* の本質的機能は一元的なものであり、*a)* から *b)* に至る推移はきわめて漸進的で自然なものであることが知られる。

これに対し、不定詞が主語となりまたは名詞的な主格叙述語となる場合には、不定詞はもとの従属的資格から超脱して新たに主格的な他位に立ち直ったものである。もっとも主語と解される場合にも、近代

英語では、そのまま文頭の主語の位置に表現されないで、形式的な *it* で始まる文の述部の後にその不定詞が配置されることが多い。この場合には、不定詞は往々述語動詞や叙述語の後に従うという語順上の制約を受けて、おのずとその従属的な潜在性を発露することがある。一般的に言って、不定詞が完全に本来の性格を捨てて名詞性を発揮するのは、述語動詞に先立った位置に表現される場合であり、それこそ歴史的発達の一つの極点を示すものである。また不定詞が述語動詞のあとであっても、*be* などの繋合詞 (Copula) を介して主語と実質的に対等の機能をもつ叙述語となっている時は、文頭における主語の場合と同様に、不定詞の名詞性発達の著しい現象として取り上げられる。(もち論、これと外形上は同じでも、*I am not to blame* とか *What is to become of her?* のように、不定詞が *be* と意味上融合し、法的 (Modal) な含蕃をもつ種類の表現は、ここで考えている範疇に属しない。)

一方 *to* を伴わない単独な不定詞そのものは、助動詞と結合したり、特定の種類の他動詞に従って目的語と接したりする構造や、その他特殊な慣用的表現の中に、見受けられる。これらは不定詞そのものの起原的な名詞的性格の名残を留めるものではあるが、ほとんど抽象化した動詞の意義素だけを端的に表出するようになっているもので、上に述べた *to* を伴う不定詞の名詞化に対照して言えば、不定詞の歴史の一次的段階にあるものと言うべきである。

英語におけるこれら2種の形式の不定詞を、近代英語 (Modern English) の立場から Jespersen のように、それぞれ “To-infinitive”, “Bare infinitive” と名付けることは便利である。しかし本稿では、歴史的ならびに比較的観点から、以下これを「前置詞付き不定詞」(Prepositional infinitive) と「単純不定詞」(Simple infinitive) と、称することにする。英語において、前置詞付き不定詞は早くから単純不定詞を差しおき、それを動詞的複合構造という一層ふさわしい領域に残留させたまま、統語上主格名詞対等の自立的機能を確立するようになった。こういう不定詞の歴史としてはいわば二次的な発達過

程を、古英語 (Old English) と中英語 (Middle English) における具体的現象に照らして観察してみようというのが、本稿の主旨である。

2 本来印欧語における不定詞は動詞の語幹を基にして発生した一種の抽象名詞であった。それは印欧祖語では **-onom* の語尾で終わる形態のものであったが、この語形は中性名詞の単数形における対格 (Accusative case) の固定したものと見なされている。印欧祖語の **-onom* は **-anam* を経て、⁽¹⁾ゲルマン語派のゴート語では *-an* に短縮されたが、古高ドイツ語 (Old High German) や古英語では、この *-an* に終わる形態が基幹的なものと見なされ、これを主格 (Nominative case) と対格に共通な格とし、それに対し与格 (Dative case) に屈折された形態が、古高ドイツ語では *za* または *zi* (>*zu*)、古英語では *to* という前置詞の後に表現された。英語の場合、不定詞に主格・対格としての *sprecan* (>*speak*) と与格としての *to spreccenne* (*or spreccanne*) (>*to speak*) という2種の形態が存在したわけである。このうち主格・対格に当たる形式の方は、実際には無格化して、主として動詞的複合構造の中に潜入し、統語的単位として自立性の欠くものとなったが、与格の形式はその機能を著しく変え、統語上主格の任にも当たりうる明析な単位となりおおせたのである。

不定詞が統語上自立的で特徴のある機能に耐えられるのは前置詞付きの形式によってであるという現状は、単に英語に限って言えることではない。上に触れたドイツ語では *zu* を伴った形式がほとんど同様な用法を確立しており、ロマンス語派のフランス語でも、*de* が不定詞に対しあたかも後接的 (Proclitic) な要素のように密着して、ほぼ同様な機能を賦与している。ただ英語の *to* はドイツ語の *zu* やフランス語の *de* に比べ無格化の程度が一層進んでいることに、注意すべきである。具体言語によるこの程度の相違は、各言語の構造一般の特質と歴史上の特殊事情に帰因するものであるが、次に英語の現象における特徴的な面を明らかにするために、ドイツ語とフランス語の現

(1) Cf. Krahe, *Germanische Sprachwissenschaft* II. § 83. 1; Priebsch & Collinson, *The German Language* § 50

象を対照的に瞥見したいと思う。

3 まずドイツ語について言えば、特に中高ドイツ語の時期以来、前置詞 *ze* (<OHG *zi, za*) がその原義的機能を弱め、次第にそれに導かれる前置詞付き不定詞が、自立的用法としては単純不定詞に取って代わるようになった。この過程は英語の場合に類似しているけれども、ドイツ語の方がその程度においてはるかに緩漫である。近代においても、次のように単純不定詞が主語として用いられる例は、英語の場合よりも頻繁に見受けられる。

…es ist so schwer, im Freunde sich *verdamm*⁽¹⁾. —Goete, in der Weimarer Ausgabe, X. 175 (q. Behaghel). (=it is so hard to condemn oneself in the friend.) / Ungeliebt durchs Leben *gehen*, ist mehr als Missgeschick, *est* ist Schuld.—Ebner-Eschenbach, *Unsühnbar* v (q. Curme)⁽²⁾. (=To go unbeloved through life is more than a misfortune, it is a fault.)

しかし単純不定詞のこの用法は、普遍的真理に関する命題的な陳述文に局限される傾向があり、⁽³⁾ 一般的な表現法とは言えないようである。Curme (*op. cit.*) は、またそれは今日特に短いきびきびした諺・格言に類する文に多く見られると説いているが、*Geben* ist seliger als *Nehmen* (=Giving is happier than taking) におけるような行為の抽象概念を表わす名詞化した単純不定詞が、その端的な例となる。*Geben*, *Nehmen* は綴字上でも大文字で書き始められていて、不定詞の名詞的本質を外形上に再現したものであるが、英語にはこれに相当する不定詞の性能が見られず、その代りに *giving*, *taking* という動名詞 (*Gerund*) が用いられていることに、注意される。

ドイツ語と英語に見られるこの相違は、二つの事情に帰せられる。一つには、英語にあっては、中英語期以来一般の屈折組織の崩壊につれて、不定詞もその新たに獲得した統語的自立性を明確に発揮する上

(1) Behaghel, *Deutsche Syntax* (II, § 731) による。

(2) Curme, *A Grammar of the German Language* (p. 275) による。

(3) Cf. Regula, *Grundlegung und Grundprobleme der Syntax* § 52 II.

に、前置詞付きという分析形式の必要度が、ドイツ語の場合に比べ大きかったことである。今一つには、古英語の純粋な名詞である *-ung* 形に由来する動名詞が、その名詞としての性質を保持しながらも、中英語以来次第に動詞的な統語能力をも発達させ、しかも名詞的概念の表現としては不定詞よりも適切で簡便な手段となっている事実を、指摘しうる。

4 次にフランス語の不定詞を導く最も普通な前置詞の *de* は、もと起原・発端を示した語で、その不定詞との結合形はラテン語における動名詞 (*Gerundium*) の風格 (*Genitive case*) の表わす意味関係を引き継いだものであった。⁽¹⁾ すなわち *Bonne chose est d'apprendre* のような文では、その原義が “A good thing comes from learning” であり、*d'apprendre* は風格としての意味機能をもつものであったが、それが次第に薄れて、文全体が “Learning is a good thing” を意味するようになり、*d'apprendre* は単なる *apprendre* と等値の表現と見なされる結果となった。この *de* の無機化の過程は古フランス語 (*Old French*) の時期から自然に漸進的に醸成し、14, 5 世紀の中フランス語 (*Middle French*) の時期には、まず *ce* や *il* を形式上の主語とする文の述部の後に際立って見られるようになり、次いで 16 世紀には述語動詞に先立つ主語としても *de* による前置詞付き不定詞が一般化するに至った。⁽²⁾ しかし今日でもなお、特に行為の抽象的な一般概念に関する陳述には、単純不定詞が、*Mentir est une honte* (= Lying is a shame) / *Dire et faire sont deux* (= Saying is one thing, doing another) / *Abuser n'est pas user* (= Abuse is not use) のように、普通に用いられる。ここにも、前節でドイツ語について述べたと同様な、英語の場合との明らかな対照を見ることができる。

以上略述したところから知られるように、英語の前置詞付き不定詞はドイツ語やフランス語のそれに比べ、特に大きく発展すべき素地に恵まれ、主格的機能にも確固とした地歩を占めるようになったわけで

(1) Cf. Ewert, *The French Language* §296.

(2) Cf. Brunot, *Histoire de la langue française des origines à 1900* I. p. 475, II. p. 458.

ある。しかし近代英語におけるこの前置詞付き不定詞の優位も、やはり古英語から中英語にわたる単純不定詞との拮抗の結果、礎き上げられたものである。以下、少しく英語史の内状に立ち入って、2種の形式の不定詞が各種の構造においてそれぞれの適応分野を求めながら、発展し淘汰された経過を、具体的に眺めて行こうと思う。

II 古英語の現象

5 大よそ 11 世紀末までの古英語期において、すでに前置詞付き不定詞の方が単純不定詞よりもはるかに多く、主格的機能を帯びて文の主語や名詞的叙述語として用いられている。Morgan Callaway, Jr. の綿密周到な研究 *The Infinitive in Anglo-Saxon* (Washington, 1913) によれば、古英語における主語および名詞的叙述語の用例は総数 378 のうち、単純不定詞が 113、前置詞付き不定詞が 265 であるという。つまり前者 30% 後者 70% の割である。⁽¹⁾ 屈折組織を具備していた古英語において、もともと与格で統語上副詞的であるべき形態の前置詞付き不定詞が主格的機能を賦与されることが多かったという事実には、次のような作因が考えられる。それは一口に言って、古英語の構文上の特質に帰せられる。不定詞の表わす行為や状態に関連した陳述には、主部と述部とからなる命題的な文形式よりも、いきなり事態の経過や判断の賓述を表出し、そのあとにそれに対する行為者や主材となる行為や状態の表現を追加しようという、具体的で追叙的な構文法が、一面の著しい傾向として注目されるのである。結果としては、非人称的 (Impersonal) 構文をなし、行為者を表現する必要のある場合は、人を示す (代) 名詞と共に、不定詞は従属的な形態をとって、叙述語や述語動詞のあとに表現されるということになる。このように、不定詞が前置詞付きの形式をなすことと同時に、叙述語や述語動詞のあと

(1) もっとも Callaway が主語として考察の範囲内に入れたものうちには、本質的には主語と看すべきではなく、むしろ叙述語や述語動詞に対し従属的な関係にあると見なすべきものも含まれている。しかしそのように用いられた不定詞が論理的に主語と意識されうるという点こそ、ここに問題とする通時的変遷の契機をなすものである。以下本章での考証は Callaway によるところが多かったが、そのほか引例については、Ernst Wülfing, *Die Syntax in den Werken Alfreds des Grossen* II. I. (Bonn, 1897) にも準拠した。

に配置されることが多いという事実も、英語の構文上における特質の反映として注意される。そして近代英語において大きな特徴をなしている形式上の主語としての *it* (<OE *hit*) の表現も、上に述べた不定詞の後置という傾向の随伴的現象に過ぎない。

以下本章および次章における記述を、問題となる構造の種類に従って、次の順に進めることとする。

(I) 主語

(A) 単純不定詞

(B) 前置詞付き不定詞

(II) 名詞的主格叙述語

このうち、(IA) と (IB) を分けて、

(a) 不定詞が叙述語または述語動詞のあとに置かれる場合

(a') *it* (または *that*) を形式上の主語とする場合

(b) 不定詞が述語動詞に先立つ場合

とし、さらに (IAa'), (IAa''), (IBa) および (IBa'') を、次の2種に分ける。

(i) 述部が「be+叙述形容詞(または叙述(代)名詞)」の場合

(ii) 述語動詞が非人称動詞の場合

(I) 主 語

(A) 単 純 不 定 詞

6 (ai) 不定詞が「**beon+叙述形容詞**」のあとに置かれる場合

古英語でも単純不定詞が文の主語と考えられる場合は、一般に少なく、それと共に述部に用いられる動詞や形容詞もかなり局限されている。そのうち述部が「*beon* (>*ben*, *be*)+叙述形容詞」からなる構造に属する例としては、

(1) …*betere ðe is mid anum eagan gan on Godes rice, ðonne twa eagan hæbbende sy aworpen on helle fyr, …*—A.-S. Gosp., *Mark* ix. 47. (=it is better for you to go into the

(1) Bosworth & Waring, ed., *The Gothic and Anglo-Saxon Gospels in parallel columns*

kingdom of God with one eye than to be cast into hell fire
 having two eyes.)⁽¹⁾ (L:…bonum est tibi luscum *introire* in
 regnum Dei, quam duos oculos habentem mitti in gehennam
 ignis, …)

が挙げられる。この例からは、単純不定詞の用法はラテン語のそれに
 準じたものと知られるが、Callaway (*op cit.* p. 183) は、一般に前置
 詞付き不定詞の同じ構造における用法と共に、古英語本来の慣用であ
 ると推定している。注意されるのは、不定詞 *gan* と平行的な位置に
 ある *ðonne* (=than) 以下の節中の *sy* (<*sie*) が仮定法の定形をな
 し、ラテン語の *mitti* (不定詞 *mittere* の受動形) とも相応していな
 いことである。このことは、英語における不定詞の受動形が当時まだ
 成熟し切っていないことを物語っているが、同じ聖書の箇所⁽²⁾に当る文
 が、Nappier's Additions to Thorpe's edition of *The Homilies of*
Ælfric (CI. 322) (q. Callaway) では、

(2)…selre ðe bið anegede *faran* to heofonan rice, ðonne
 mid twam eagum *beon* aworpen on ece susle (=eternal tor-
 ment).

と、*ðonne* の後にも受動態を形成する不定詞の *beon* が用いられている。

なお (1) (2) 共、関係する人の表現は叙述形容詞の後に *ðe* という
 与格形の代名詞によってなされている。この従属的な与格 (または時
 に対格) 形の (代) 名詞の用法は、この後中英語期にまで維持されて
 いるが、共に用いられる不定詞の従属的本質と関連して、注意される
 べきものである。

7 (ii) 述語動詞が非人称動詞の場合 単純不定詞の用例として

with the Versions of Wycliffe and Tyndale の ANGLO-SAXON (995) 欄を指す。以下本
 稿に引用する Anglo-Saxon 訳および Wycliffe 訳の聖書の文はすべて同者による。

(1) 以下 Anglo-Saxon 訳の聖書の引用文には、参考のためラテン語訳を付記する。テキストは
Biblia Sacra, vulgaræ editionis, Sixti V Pontificis Maximi, Jussu recognita, et Clemen-
tis VIII, auctoritate edita による。

(2) ただし同じ Anglo-Saxon 訳でも、(1) と内容の重複している *Matt. xviii. 9* では、次のよ
 うに *gan* に相当する部分か前置詞付き不定詞の *to ganne* となつて、(Bai) 型の構造をなしてい
 る (cf. §8 (6)). *Betera ðe ys mid anum eage on life (=into life) to ganne, ðonne*
ðu si mid twam asend (=sent) on helle fyr.

は、前節に述べた (i) の場合よりも多く見受けられる。

(1) Ne meahste hie gewurðan weall stænenne up forð *timbran*, …—*Genesis* 1075—6. (=It so happened that they could not build up the stone wall.)/ (2) …Pharisei…hine axodon, Hwæðer alyfþ ænegum men his wif *forlætan*?—A.-S. Gosp., *Mark* x. 2. (=The Pharisees asked him whether any man should be allowed to leave his wife.) (L: …pharisæi interrogabant eum: Si licet viro uxorem *dimittere*, …)/ (3) Hu ne gebyrede ðe *gemiltsian* ðinum efen-þeowan, swa swa ic ðe gemiltsode?—A.-S. Gosp., *Matt.* xviii. 33. (=Was it not fitting for you to have mercy on your fellow-servant, as I have mercy on you?) (L: Nonne ergo oportuit et te ⁽¹⁾ *misereri* conservi tui, sicut et ego tui misertus sum?)/ (4) …ðe gedafenað abbot zosimus for me and for eallum *gebiddan* …—*Ælfric's Lives of Saints* xxiiiB (III. 18. 260—1). (=it befits you, Abbot Zosimus, to pray for me and for all.)/ (5) …hie ne anhagað nane wuht nytwierðes *don*.—*Gregory's Pastoral Care* xl (288. 16). (=they have no inclination to do anything useful.)/ (6) Geat unigmetes wel, rofne randwigan *restan* lyste; …—*Beowulf* 1792—3. (=Geat, the brave warrior, was exceedingly pleased to rest.)

これらの例では、それぞれ *gewurðan* (=happen), *alyfan* (=be allowed), *gebyrian* (=be fitting), *gedafenian* (=be fitting), *anhagian* (=please), *lystan* (=please) (そのうち *gebyrian* と *lystan* を除いて他はみな古英語期末までに廃用になっている) という非人称動詞が単純不定詞を従えているが、前節の (1) (2) の場合同様、同時に与格または、(5) と (6) のように、対格の人を示す付加語をも伴っている。それは近代英語では *for* に先立たれて分析化されると共に、

(1) *te* は対格。ラテン語の *oportere* (=be proper, behove) は「対格+不定詞」の構造を従える (cf. §9 (2)).

叙述語や述語動詞よりも不定詞の方に引き付けられて行く運命にある。一方単純不定詞は主格としての形態を保持し、論理的にも主語としての十分な資格を備えているように見える。しかし語順の上で、(6)を除き、いずれも非人称動詞のあとに置かれ、実質的にはむしろそれに従属的に接合していると言えるものである。(6)でも…*restan lyste*という語順は、詩における頭韻 (Alliteration) の制約による結果に過ぎない。こういう語感からすれば、この種の構造における単純不定詞は非人称動詞に対する主語というよりは、むしろ発生的な対格としての従属的性格を潜めているものであり、それが一方において後に前置詞付き不定詞に置き換えられるというのも、その潜在性が顕現されたものと言うこともできる。単純不定詞から前置詞付き不定詞への推移は、言わば不定詞が非人称動詞の支配を脱して、主格的性質を明示するに至る過程である。従って上に述べた人を示す斜格の(代)名詞と同じく、不定詞も従属的から主格的へという道を辿るようになったと見なすことができるのである。

他方においてはまた、非人称動詞に従う単純不定詞は、その本来の従属性を強めて定形動詞である非人称動詞と融合し、後者が次第に人称的(Personal)な構造に用いられるようになるにつれて、それを助動詞とする本動詞としての性格を帯びようになる。この過程は中英語の後期に現われてくるのであるが、古英語におけるこの種の単純不定詞は、自立性への脱皮か、従属性への潜入かの、二つの可能性をはらんでいるわけである。

古英語における単純不定詞は、叙述形容詞に従うにせよ、非人称動詞に従うにせよ、hit (=it) を形式上の主語とする構文に現われることが滅多にないということも、上に述べた性格に関連して考えられる。hit の表現は、あとに続く不定詞がかなり明確に名詞的機能の単位として意識された場合に、それと呼応して生じる現象である。古英語では、中英語以後に比べ、この形式的な代名詞は前置詞付き不定詞とも一般に用いられることが少ないが、ことにその性格が安定せず、多分に浮動的な段階にある単純不定詞と関係しては、自然表現される機会

(1)
を持ちにくいわけである。

(B) 前置詞付き不定詞

8 (ai) 不定詞が「**beon+叙述形容詞(または叙述名詞)**」のあとに置かれる場合 一般に古英語で文の主語と考えられる不定詞としては、前置詞付き不定詞の方が単純不定詞よりもはるかに多く見られる。前置詞付き不定詞は、形態上でも通例 *to* のあとに *-nne* で終わる明確な与格形の付いた形式で表現されている。表題の構造では、本来前置詞付き不定詞はその与格の意味機能によって形容詞の表わす性質状態の適応される方向を指定 (Specification) するものであった。しかし構文中における各単位間の疎密さが自然に推移して、不定詞が形容詞から分離して考えられ、それに対して主語としての関係にあるものと意識されるようになった。この機能関係の推移の結果は、すでに古英語に現われているが、次にその点に注意しながら用例を眺めてみよう。

(1) *Nō þæt yðe byð to befleonne*...—*Beowulf* 1002—3. (=It is never easy to escape that, *i. e.* death.)/(2) ...*him leofre wæs se cristendom to beganne þonne his scira to habbanne*. —*Orosius* vi. xxxi (286. 7—9). (=it was more preferable for him to worship the christianity than to have his office.)/(3) ...*him wæs lað to amyrrene his agenne folgað*.—*Anglo-Saxon Chronicle*, E 1048. (=it was loathsome for him to spoil his own earldom.)/(4) ...*ðeah bið giet earfoðre ælcne on sundrum to læranne*, ...—*Gregory's Pastoral Care* LXI (455. 5—6). (=yet it is still more difficult to teach them all separately.)/(5) *Forðæm is gesceadwislice to ðenceanne hwelcum tidum him gecopust sie to sprecanne*, ...—*Ibid.* xxviii (274. 17—18). (=Therefore he is sagacious enough to consider

(1) Callaway (*op. cit.* p. 15) と Wülfing (*op. cit.* p. 195) とに見出される一つ一つの (Aa'ii) 型の用例を次に記しておく。ただし (2) の *hit* は *habban* の目的語とも解されるものである。(1) · ac *hit* ne fremede him swa *gedon*.—*Ælfric, Homilies* I. 394. (=but it did not benefit him to do so.) (cf. § 9 (11))/(2) *hu ne biþ ælc mon genog earm þæs ðe he næfþ, ðonne hit him lyst habban*.—*Boethius* 142. 9. (=how nobody is so wretched because he has not something when he wishes to have it.)

when it is most suitable for him to speak.)/ (6) …god ys uher to beonne. —A.-S. Gosp., *Matt.* xvii. 4. (=it is good for us to be here.) (L: …bonum est nos hic esse;…) / (7) …bio ðe uniðe to clipianne & to læranne, ge furðum ðina agna spræca, …—*Gregory's Pastoral Care* XLVIV (385. 10—11). (= let it be hard for you (*i. e.* don't be ready) to call out and advise, even in your own affairs.)

このうち、(1) は不定詞を用いるこの種の構文の起原的本質を探るのにふさわしい例である。問題は指示代名詞 *þæt* (=that) が主格であるか対格であるかにかかっているが、*No þæt yðe byð* (=That is never easy) で一応完結した陳述と見なし、*þæt* を主語と見るのが、原始的で素朴な表現過程に則した見方であろう。そのように考えれば、そのあとの *to befeonne* は前の *yðe* の意味の適応方向を指定し、‘in escaping’ ほどの意で副詞的に追加された表現と見なすことができる。しかし意味の上では *þæt* は *befeonne* の目的語の関係に当たるため、両者が結びれて纏まった観念を表わすとする見方も許されるようになる。このように、主語として把握される観念が具象的な「もの」から抽象的な「こと」に移り、それだけ陳述様式が論理化するというのが、統語法の変遷に見られる一般的動向である。現代英語でも *He is easy to live with* (cf. *It is easy to live with him*) や *She is hard to please* のような表現があるが、ここに述べた原始的で具象的な統語法の特質を論理と矛盾することなく今日まで伝えている例である。

(2) (3) (4) は不定詞が他動詞でその目的語の関係に当たる語を伴っている点では (1) と同じ特徴を示している。ただ (1) と違って、目的語の関係の名詞や代名詞が語順の上で不定詞に付着しており、統語的推移の跡を明らかにしている。それでも (2) では不定詞と目的語と解される *se cristendom* が *þonne cristendom* とならず、形態上で主格であることを示している。*þonne* のあとで一層次の不定詞と密

(1) ラテン語の *nos* は対格 (cf. *nobis*).

着している観のある *his scira* は女性複数形で主格であるか対格であるかは識別されないが、やはり構造上 *se cristendom* と対応した位置にある点から、主格と見られるべきものであろう。しかし(3)となると、語順の上でも形態上でも *his agenne folgað* が *to amyrrene* の目的語であることが明示されている。(4)の *ælcne* は不定詞に先立っているが、それが目的語として用いられたものであることが、形態上から知られる。

上に述べたことは、不定詞の意味上目的語に当たる語が発生的に文の主語であったとする観点に立っているが、それとは別に、§7で述べたように、本来この種の構文は主語をもたない非人称的構文であるとする見方が一層本質的なものと考えられる。たとえば(3)の *to amyrrene his agenne folgað* を取って見ても、それは不定詞の目的語を含みながら全体として纏まりのある句をなして、前の叙述形容詞の *lað* に対し従属的に追加された単位と見なされるのである。そして(5)(6)(7)のような不定詞が自動詞である例については、一層この見方が有力なものとなる。これらの例で叙述形容詞の後に添えられた前置詞付き不定詞を文の主語と見るのは、近代的思考によって構文を論理的に再構成した解釈に他ならない。不定詞の用法の本質を考えるにつけて、古英語において不定詞がこの従属的な位置に前置詞付きの形式で屈折形で表現されるという事実は、単に無機化した形骸の現われとして見過ごすことができない。

以上(1)から(7)までに挙げた例は叙述語として形容詞を含むものであるが、まれに叙述名詞が用いられている例も見受けられる。これは往々語順上からその名詞が主語で不定詞が主格叙述語であると解されもする(cf. §13)が、意味上からこの(Bai)型の範疇に属すべきであると考えられるものである。ここでも注意されるのは、不定詞が前置詞付きの形式で現われ、潜在的に叙述名詞に対し従属的な意味関係を暗示していることである。

(8) *Nis nan earfoðnyss ðam ælmihtigan gode...to helpenne on ge-feohte and healdan þa ðe he wile.—Ælfrie's Lives of*

Saints xxv. 308—310 (III. 86) (=It is no difficulty to the Almighty God to help in battle and support those whom He will.) / (9) Sorh is me to *secganne* on sefan minum gumena ængum, hwæt me Grendel hafað hynðo on Heorote mid his hetepancum, færniða gefremed; …—*Beowulf* 473—6. (=It is sorrowful for me to tell anyone what humiliations and afflictions Grendel has given me with his hatred in Heorot.) / (10) Wundor is to *secganne*, hu mihtig God manna cynne þurh sidne sefan snyttru bryttað, eard ond eorlscipe; …—*Ibid.* 1724—7. (=It is wonderful to say how mighty God generously distributes to mankind wisdom, land and rank)

(9) と (10) で、論理的な主語はむしろ hwæt 以下, hu 以下の名詞節で、その前の不定詞 to *secganne* は共に ‘in saying’ の意で叙述名詞に従属的に関係するものであるとは、上の (1) から (4) までについての観察に準じて言えることである。ことにテキストで hwæt, hu の前にコンマが押され、休止を示していることから、一層この解釈が妥当しているように思われる。しかしここでも注意すべきことは、論理的主語をどれと定めるにせよ、構文全体に非人称的な特徴が顕著に認められることである。

なお (8) の平行する二つの不定詞のうち、叙述語に近い位置にあるものは前置詞付きの形式で to *helpenne* と、あとにあるものは単純形で *healdan* と、なっている。これに相当する近代的現象は、中英語以後で、たとえば §20 (4) におけるように、to が等位的な二つの不定詞に共通してかかっている表現に見られる。しかし屈折的段階にある古英語で、*helpenne*…*healdan* という語尾形態の差が明示されている事実については、また特別な見解を加える必要がある。すなわち初めの不定詞は叙述語への本来の従属性をそのまま形態上に顕現しているのに対し、あとの不定詞は叙述語からの距離が大きくなるにつれ、その影響の範囲を脱して単純形で現われるようになったと、解されるのである。⁽¹⁾

9 (ii) 述語動詞が非人称動詞の場合 古英語においては、不定詞が非人称動詞に従う構造でも、前置詞付き不定詞が一層多く用いられている。前節で不定詞が叙述語に従う場合も、非人称的構文の特徴を備えるものであると述べたが、本節で観察する用例はそれを端的に表明している。まず §7 の (2) から (6) までにおけると同じ *alyfan*, *gebyrian*, *gedafenian*, *anhagian*, *lystan* を述語動詞とする例を挙げて、(Aaii) 型の場合と対照してみることにする。

(1) *Alyfþ gaful to syllyanne ðam Casere?*—A.-S. Gosp., *Mark* xii. 14. (=Is it allowed to pay tribute to Caesar?) (L: *Licet dari tributum Cæsari…?*) / (2) *Me gebyraþ to wyrcanne ðæs weorc ðe me sende,* …—A.-S. Gosp., *John* ix. 4. (=It behoves me to work the works of him who sent me.) (L: *Me oportet operari opera ejus qui misit me,*…) / (3) *Ðe gedafenað abbud Zosimus to biddenne and to bletsigenne* …—*Ælfric's Lives of Saints* xxiii (III. 16. 227—8). (=It befits you, Abbot Zosimus, to pray and bless.) / (4) …*ic hæbbe nu gegaderod on þyssere bec þæra halgena þrowunga þe me to onhagode on englisc to awendene* …—*Ibid.*, Pref. (I. 4. 36—38). (=I have now collected in this book the passions of the saints which I was pleased to translate into English.) / (5) …*ic gehwam wille þærto tæcan þe hiene his lyst ma to witanne.* —*Alfred's Orosius* III. iii (102. 24—25). (=I will now teach anyone that desires to know more of it.)

特に (3) は §7 (4) と比較されるべきであるが、一般に上の諸例を §7 (2) ~ (6) と対照して知られることは、不定詞が非人称動詞に位置の上で一層接近していることである。不定詞の非人称動詞に対

(1) この現象について、Callaway (*op. cit.* p. 20 ff.) は同じく叙述語や述語動詞からの影響説を採っているが、叙述語や述語動詞から遠くにある単純不定詞の方が本来のものであり、近くにある前置詞付き不定詞はその叙述語や述語動詞に非論理的に牽引された結果であるという、筆者とは違った見方をしている。

(2) ラテン語の *dari* は不定詞 *dare* (=give) の受動形。

して本質的に潜めている従属性が、前置詞付きの形式によって顕現化されていると言えよう。なお他の非人称動詞を含む例を挙げれば、

(6) …geutlageden þa ealle Frencisce men…buton swa feala swa hig geræddon þæt þam cynge gelicode mid him to hæbbenne, …—*Anglo-Saxon Chronicle*, C 1052 (180—2). (=they outlawed all the Frenchmen except as many as they decided that the king was pleased to have about him.) / (7) Nu ge Ʒeare cunnon hwæt eow þæs on sefan selest þince to Ʒecyðanne …—*Cynewulf's Elene* 531—3. (=Now you know clearly what seems best to your mind to reveal.) / (8) Gyf hyt swa ys ðam menn mid hys wife, ne fremap nanum menn to wifienne. —A.-S. Gosp., *Matt.* xix. 10. (=If it is so between man and wife, it does not benefit any man to marry.) (L: Si ita est causa hominis cum uxore, non expedit nubere.)

(6) の (ge)lician (=please) と (7) の þincan (=seem) は、それぞれ近代英語では like, think と人称動詞化して伝わっているが、(8) の fremian (=benefit) は古英期末までに廃用となっている。前の (4) (5) についても言えることであるが、(6) (7) のように、不定詞が他動詞の場合には、その意味上の目的語に当たる語 ((4) では þe, (5) では ma, (6) では þæt, (7) では hwæt) を非人称動詞の主語と見れば、不定詞はラテン語の動詞状形容詞 (Gerundive) と同様、受動的意味を含んで前の陳述を限定する機能のものと解される。特に (7) の to Ʒecyðanne にはそのような補足語的な性質が濃く感ぜられる。

10 (a'i) hit (または þæt) を形式上の主語とし、述部が「**beon** + 叙述形容詞 (または叙述 (代) 名詞)」の場合 §§ 8, 9 に観察した用例では、みな前置詞付き不定詞が叙述語または述語動詞のあとに表現されて、多分に補足語的な副詞要素としての本質を構造上に具現している。それはいわば主語なしに始まる陳述のあとに添えられて、おのずと意味上主語の関係にあるものと意識されるようになるのであり、

もともと非人称的構文を構成する一要素である。しかしこの種の構文にも、一応形式的に主語を表現する手段が採られることがある。それはいきなり文頭に立たなければならない叙述語や述語動詞の支柱となり、文としての形式的均衡を保全するために、hit を主語の位置に表現することである。結局あとに置かれた前置詞付き不定詞が主語と意識される時、その不定詞は hit に対し同格であると考えられることとなる。英語の統語法が後に「主語＋述語動詞」の語順を確立して行くにつれ、この古英語の hit に由来する it が不定詞と呼応する“it…to～”の型はほとんど固定的なものとなるが、その過程はほぼ前置詞付き不定詞の自立化の程度と平行しており、古英語ではまだ hit の表現は偶発的なものでしかない。表題の構造は比較的に多く見られるものであるが、それでも hit を用いない (Bai) 型に比べれば、その用例は少ない。

- (1)…hit is ðeah earfoðre ealle ætsomne to læranne, …—*Gregory's Pastoral Care* LX (453. 11—12). (=it is still more difficult to teach them all together.) / (2)…hit bið swið unieðe ægðer to donne, ge wið ðone to cidanne þe yfel deð, ge eac sibbe wið to habbanne. —*Ibid.* XLVI (354. 21—22). (=it is very difficult to do both, to chide him who does evil and to have peace with him.) / (3)…hit is god godne to herianne & yfelne to leanne, …—*Bede's Ecclesiastical History*, Pref. (2. 10—11). (=it is good to praise the good and blame the bad.) / (4) Hit is nu ungeliefedlic to secganne…hwæt on þæm gewinne forwearp. —*Alfred's Orosius* v. xi (238. 2—3). (=It is now incredible to say what was destroyed during the war.) / (5)…monega gefeoht gewurdon on þæm dagum on monegum landum, þæt hit nu is to longsum eall to geseccenne. —*Ibid.* iv. xi (208. 19—21). (=So many battles were fought on the day in many lands that it is now too tedious to tell of them all.) / (6) Hit is scondlic…ymb swelc to sprecanne

hwelc hit þa wæs, …—*Ibid.* i. x (48. 4—5). (=It is disgraceful to speak about what it was then.)

(1) は特に § 8 (4) と比較されるべきであるが、一般にこれらの例を § 8 の (ai) 型の例と対照して気付くことは、前置詞付き不定詞の方が単純不定詞よりも前の叙述形容詞に密接につながっていることである。(4) ではまた、hit と同格関係にある主語は不定詞の *to secganne* ではなく、*hwæt* 以下の名詞節であり、*to secganne* は叙述形容詞 *ungeliefedlic* にかかる副詞的な要素であると見る解釈もなり立つ。(5) (6) では同じ解釈を下すことが無理であるが、漠然とした事情 (Situation) を暗示する主語としての hit に始まって形容詞で一応完結した陳述に対し、不定詞があとから追叙的な表現を敷衍するという本質的機能をもっている点では、(4) (5) (6) とも共通している。特に (5) では *to* に導かれた不定詞が叙述形容詞に付加された副詞 *to*(=*too*) と、おのずと意味上で呼応し、その程度を指定する機能を帯びており、その点から一層従属的な本質を露呈していると言える。

上に hit が漠然とした事情を暗示すると述べたが、その指示作用が特定のなものに強調される場合には、hit は *þæt* (=that) に代えられる。近代英語ではこの種の構造に that の見られるのは珍しいが、具象的表現法を好む古英語の特徴を示している。なおドイツ語やフランス語では、今日でもそれぞれ *es*, *il* のほかに *das*, *ce* (*or cela*) を用いることのあるのは、この古英語の *þæt* の用法と平行している。

(7) *Þæt is ungeliefedlic to geseccanne*··*hwæt þæs ealles wæs.* —*Alfred's Orosius* v. xii (240. 16—17). (=It is disgraceful to say what this all was.) / (8)··*ḡæt is unrihtlic & unalyfedlic ænigum men to geḡæncanne oððe to cweḡanne.* —*Wærferth* 334. 22—23 (q. Callaway). (=it is wrong and unallowable for any man to thank or speak.)

特に (7) は上の hit を用いた例の (4) と比較されるべきであるが、具象的な *þæt* で始まる文では一層あとの前置詞付き不定詞は叙述語に対する補足語としての性質を感じさせる。ここでも、この位置にお

ける不定詞の主格的機能の発達は、文頭におけるより抽象的な *it* の用法の確立とほぼ平行しているという現象に注意される。

以上はみな叙述語が形容詞の場合の例であるが、まれにまた名詞や代名詞が叙述語として用いられている例が見受けられる。そしてこの場合にも、形式上の主語の *hit* に代わって *þæt* が用いられることがある。

(9) *Hit* is halig geðort and halwende to gebiddenne for ðam forð-farendum...—*Ælfric's Lives of Saints* xxv. 479—80 (III. 98). (=It is a holy and saving thought to pray for those who are departed.) / (10) *Soplice nis hit na min inc to syl lenne þæt gyt sitton on mine swyðran healfe oððe on ða wynstran, ac ðam ðe hit gegearwod ys.*—A.-S. *Gosp., Mark* x. 40. (=Truly it is not mine to grant you both, that you may sit on my right hand or my left, but to grant those for whom it is prepared.) (L: *Sedere autem ad dexteram meam, vel ad sinistram, non est meum dare vobis, sed quibus paratum est.*) / (11) ...*þæt is ðeah micel syn to geþencenne be Gode, þæt*...—*Boethius* 214. 15 (q. *Wülfing*). (=it is, however, a great sin to remember concerning God that...)

(10) における叙述語の *min* (=mine) は今はすたれている 'my affair, my business' (cf. OED s. v. *MINE poss. pron.* 6 b) の意であるが、文の構造がラテン語訳のものとは異なり、また内容の重複している *Matt.* xx. 23 はこのラテン語訳と同じ構文になっている。それは外形上 (Bb) 型をなすので、改めて §12 に挙げ、その際上の (10) と関連してその構文も検討してみるつもりである。(11) で指示詞 *þæt* と同格となるのは接続詞の *þæt* に導かれる名詞節で、不定詞は多分に従属的であると言えるのは、上の (7) の場合と同じである。

11 (ii) 述語動詞が非人称動詞の場合 §10 に比べその用例の少ないのは、この種の構文では前置詞付き不定詞の従属性が一層強く感

ぜられ、自立的な主語としての意識が比較的に弱いためである。非人称動詞に従う前置詞付き不定詞には、形式上の主語としての *hit* に代表されるに足るだけの力が発揮され難いと、言えるのである。またこの種の構造に、*hit* に代わって *ƿæt* の用いられることも、自然少なくなる。

(1) *Hu magon beon gefyllede ða halgan gewritu…? forðam ðus hyt gebyraþ to beonne.* —A.-S. Gosp., *Matt.* xxvi. 54. (=How may the holy scriptures be fulfilled? For it behoves to be so.) (L: *Quomodo ergo implebuntur Scripturæ, quia sic oportet fieri?*) / (2) *…ac me lyste hyt nu bet to witanne.* —*St. Augustine's Soliloquies* 195. 23 (q. Wülfing). (=but it now pleased me to know better.) / (3) *…ƿæt him syllum selle ðynceð leahtras to fremman ofer lof Godes.* —*Judith* 408 (q. Callaway). (=it seems better to himself to further vices more than the praise of God.)

形態に関することであるが、(3) の古英語後期からの韻文の例では、*to* の後に無屈折形の *fremman* が用いられている。不定詞のもとの与格語尾 *-ne* は一般には 12 世紀ごろに消失したが、すでに古英期中に、韻律の影響によってではあるが、このような形態上の崩壊の萌しが見られた⁽¹⁾。不定詞の分析的標識としての前置詞 *to* がすでに形骸化し始めていたわけである。

12 (b) 不定詞が述語動詞に先立つ場合 古英語では、韻律上の制約のある場合（たとえば § 7 (6)）を除き、また従節という古英語期における語順規定上の特殊な拘束から免かれた例では、主語と見なされる不定詞は普通述語動詞のあとに表現されている。それは、不定詞がその本来の性格に基づき叙述語や述語動詞に対し従属的な位置を保持していることの現われであり、不定詞がこの従属的な位置を離れて述語動詞に先立つ主語の位置に立ち、自立化した主格的機能を語順

(1) すでに *Beowulf* に次のような *to* に従う無屈折の不定詞の例が見られる。 *Mæl is me to færan,* . . .—316. (=It is time for me to go.)

の上に十分に反映できるようになるには、古英語期後なお数世紀の経過を必要としたのである。次に挙げる一例は、外形上ではこの新しい段階にある構造を示しているが、実質的にはラテン原典の非論理的な構文を模写した偶発的現象に過ぎない。

(1) …to sittanne on mine swyðran healfe oððe on wynstran, nys me inc to syllanne; ac ðam ðe hyt fram minum fæder gegearwod ys. —A.-S. Gosp., *Matt.* xx. 23. (=to sit on my right side or on my left side, is not for me to grant to you, but to those for whom it is prepared by my Father.) (L: …sedere autem ad dexteram meam vel sinistram, non est meum dare vobis, sed quibus paratum est a Patre meo.)

この聖書からの引用文は、§10 (10) に挙げた *Mark* x. 40 とほぼ重複した内容が異なった構文によって表現されたものである。*Mark* x. 40 で *pæt* 以下の従節で表現されている内容がここでは文頭の主語の位置に不定詞句の形で据えられ、*Mark* x. 40 で *hit* によって代表されていると見なされる *to syllenne* (=to give or grant) はここでは *to syllanne* となって *nys* (=is not) の後の叙述語として表現されている。どちらの文にあっても、*to syllenne* [*syllanne*] の本質的機能は、この *Matt.* xx. 23 に見られるような従属的なものと認められる。問題は ~ *pæt* gyt sitton… と *to sittanne* … ~ との間の相違である。後者はラテン語訳における構造をそのまま写したものであるが、意味の絡脈の上からは前者の方が分かりよく、前者には後者における非論理的構文法を論理的に再構成しようとした試みの跡が看取される⁽¹⁾。しかしいずれにしても、古英語における不定詞構造のもつ非人称的特徴として、非論理性は免かれない。

(1) ちなみに *Mark* x. 40 のゴート語訳 (cf. Bosworth & Waring, *op. cit.* p. 224a) も “*þata du sitan. nist mein du giban, …*” となっていて、ラテン語訳と同じ構造で現われている。英訳聖書でも Wycliffe 訳以後 *Revised Standard Version* (1946) に至るまでラテン語訳における構文が踏襲されている。なお日本語訳では欽定訳に準じたものは「わが右左に坐することは、われの与うべきものならず…」とやはり同じ構造であるが、1955年改訳の口語訳では「わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく…」となっている。

(II) 名詞的主格叙述語

13 一般にこの用法は主語としての用法に対し随伴的に見られる現象であり、その用例も主語としてのものよりも少ないことは、単に古英語に限ったことではない。ただ不定詞の主格的機能のまだ確立していない古英語期では、この用法が一層不安定な様相を呈しているわけである。そのため主格叙述語の例として挙げられるものうちにも、しばしば主語として、あるいはさらに本源的に従属的要素とも、見られることがある。形式としては、主語の場合同様、前置詞付き不定詞が普通で単純不定詞がまれであるが、それはこの機能の不定詞は自然 *beon* のあとに従うため、不定詞としての斜格的潜在性を形態上に反映し勝ちになることによるものと考えられる。次に不定詞が比較的にこの機能を果たしていると解されそうな例を挙げるが、そのうち単純不定詞の用いられているのは (1) だけである。

(1) …he… to þam mynstre ferde on þære ylcan tide þe
 heora easter-gewuna wæron to-gædere ⁽¹⁾ *becuman*. —*Ælfric's Lives of Saints* xxiiiB (III. 42. 641—3). (=he went to the minster at the same time, when their custom of Easter was to assemble together.) / (2) Ðæt eac swilce his þeaw wæs on oðrum cyninges tune to *donne*, …—*Bede's Ecclesiastical History* III. vii (202. 29—30). (=His custom was also to do that at the other dwellings of the king.) / (3) Hig namon ðæs Hælendes lichaman, and bewundon hine mid lineum claðe mid wurt-gemangum, swa Iudea þeaw ys to *bebyrgenne*. —A.-S. Gosp., *John* xix. 40. (=They took the Saviour's body and wrapped him in linen clothes with spices, as the Jews' custom is to bury.) (L: *Acceperunt ergo corpus Jesu, et ligaverunt illud linteis cum aromatibus, sicut mos est*

(1) Bosworth & Toller, ed., *An Anglo-Saxon Dictionary, Supplement* の *Easter-gewuna* の項は、この例文を挙げ、“…wæron (wæs?)…”と注を付け加えている。

Judæis sepelire.)

これらの用例は § 8 (8) (9) (10) と比較されるべきである。事実不定詞の従属的本質に鑑みれば、これら 2 群の用例は同じ心理に基づく統語法に支配されている現象と見るのが、真相を衝いていることにもなろう。上の (3) にしてみても、近代的な陳述の論理に従えば、swa Iudea feaw ys to bebyrgenne はむしろ ‘as it is the Jews’ custom to bury’ と訳されるべきで、論理的には to bebyrgenne は主語と考えられるところである。要するに古英語におけるこれらの例は論理的統語法が発達し尽くしていない段階の現象であり、その意味での不定詞の名詞的主格叙述語としての機能は中英語の後期に至らなければ見られないと言える。

なお Callaway (*op. cit.* p. 193) は、この用法の不定詞は多く上の (1) のような古英語後期の作品に現われ、また (3) におけるようなラテン語の原典に用いられた不定詞の翻訳も見られるところから、ラテン語の影響によるものと推察している。

III 中英語の現象

(I) 主 語

14 不定詞の主格的機能は、およそ 12 世紀から 15 世紀に至る中英語期のうちでも、後半の 14 世紀にはいってようやく一般化している。特に顕著な現象は、不定詞の主語としての用法が it (<hit) を形式上の主語としそれに呼応して前置詞付きの形式であとに従う “it …to ~” すなわち (Ba’) 型の構文の普及とほぼ平行して発達したことである。前置詞付き不定詞が一般に単純不定詞に比べて優勢であったことはすでに古英語に始まっていたが、その傾向は中英語に至って急激に増長されることになったが、それには次のような作因が考えられる。

§ 3 で触れたように、英語一般に見られる語尾音節における母音の弱化和屈折組織の崩壊に伴ない、古英語の単純不定詞の語尾 -an も中英語では -en に弱められ、やがて語尾子音の -n を落として -e とな

り、ついにはその -e も中英語期末に無音化した。一方、前置詞付き不定詞における屈折語尾もまず -enne, -ene と弱まり、12 世紀には与格語尾の -e を消失して、主格・対格形としての -en と同形となった。古英語の *writenne*, *writanne* が *writene* を経て *writen* となり、もとの与格形が主格・対格形に合流し、共に *write* への単純化の道を歩んだわけである。ここにおいて不定詞としての *write* は、定形動詞としての直説法・仮定法の現在形および命令法の *write* と形態上では識別され得ないものとなった。その結果、すでに古英語において本来の与格指示の機能を失いかけていた前置詞 *to* は、自立的機能を果たす際の不定詞にとって、識別上必要な形態の一部と見なされるようになった。このようにして、単純不定詞はその原始的機能のためには動詞的複合形式の中に没入するか、さもなければ明確な前置詞付き不定詞に取って代えられようとする気運が生じたのである。

なお 13 世紀ごろに前置詞付き不定詞の *to* と無差別に用いられ始めている *for to* は、無機能化した迂言形として *to* のあとに同じ道を辿ったものである。この *for to* 付きの不定詞は近代の標準語法では廃用となったが、前置詞付き不定詞の進出と考え合わせて、興味深い現象である。

(A) 単純不定詞

15 (ai) 不定詞が「ben+叙述形容詞(または叙述名詞)」のあとに置かれる場合 前置詞付き不定詞を用いる場合に比べて、その例は少なく、特に Chaucer の例にあっては、*to* の欠如は詩行における韻律の制約によるものであることが知られる。

(1) …bet us were in Egipte ⁽¹⁾ben. —*Genesis and Exodus* 3315 [c. 1250] (q. Sanders). (=it would be better for us to be in ⁽²⁾Egypt.) / (2) …thee is bettre *holde* thy tonge stille, than for

(1) 中英語の引用例については、作品の年代がかなり大きな意義をもち、言語現象に影響するところが少なくないことに鑑み、以下本章での引用例には初出の作品に限り、その著作年次を [] 内に記すこととする。

(2) Hermann Sanders, *Der syntaktische Gebrauch des Infinitivs im Frühmittelenglischen* (Heidelberg, 1915) のこと。本章では特にこの著と、John Samuel Kenyon, *The Syntax of the Infinitive in Chaucer* (London, 1909) とに、よるところが大きかった。

to speke. —Chaucer, *C. T.*, “The Tale of Melibeus” § 24 [c. 1386]. (=it is better for you to hold your tongue still than to speak.) / (3) Yete me is best *take* mi chaunce. —*Lay le Freine* 107 [c. 1330] (q. OED). (=Yet it is best for me to take my chance.) / (4) For him was lever *have* at his beddes heed Twenty bokes…Than robes riche, or fithele, or gay sautrye. —Chaucer, *C. T.*, Prol. 293—6. (=For it was dearer for him to have twenty books at the head of his bed than rich robes, fiddle, or gay psalter.) / (5)…wo is him to *pese* payns *ben* ordent. —*The XI Pains of Hell* 106 [a. 1300] (q. Sanders). (=it is sorrowful for him to be destined to these pains.)

どの例でも、叙述形容詞に付加される人を示す語として与格の人称代名詞が用いられており、構文が非人称的なものであることに注意される。これらはみな与格の代名詞を主格とし、その他多少の改変を加えれば、容易に人称的構文になりうるものである。⁽²⁾ たとえば (1) の *bet us were…ben* からは *we had better be…* が近代において生じている。この新しい人称的構文にあっては、*be* は機能上定形動詞の *had* (=would consider) に対し目的語の関係に当たっているが、意味上では *had better* に密接に融合して、3 語で慣用的な複合動詞をなしている。このことに関連して、もとの構造でも単純不定詞の叙述形容詞へのつながりがかなり緊密であり、たとえ論理的には前者は後者に対し主語の関係にあるとも言えるにしても、本質的な意味の絡脈から言えば、むしろ前者が後者に従属的に付加された表現であることが、

(1) *The Canterbury Tales* の略。なお本章での Chaucer からの引用はすべて Skeat, ed., *The Complete Works of Geoffrey Chaucer* による。

(2) 次の例は上の (4) と比較されるべきであるが、非人称的構造から人称的構造へ推移する契機をなしている。Bot hit ar ladyes innoȝe þat leuer wer now þe haf þe in hor holde þen much of þe garysoun oþer golde þat þay hauen. —*Sir Gawain & þe Grene Knyȝt* 1251—4 [c. 1360]. (=But there are a great many ladies who would now rather have you in their possession than much of the treasure or gold that they have.) ここで *leuer wer* に先立つ関係詞 *þat* は容易に主語と感ぜられ、従ってあとの単純不定詞 *haf* は *leuer* に対する従属的な補足語と意識されるようになる。

知られる。この不定詞の叙述形容詞に対する非論理的な緊密性が単純形を取らせた要因であると見なすことができる。現に(2)では、韻律という外的な影響は別として、叙述形容詞 *bette* に接した位置には単純不定詞の *holde* が用いられているのに対し、統語上対等でありながら離れている位置には前置詞付き不定詞の *for to speke* が用いられている。この点、古英語の §8 (8) におけるような現象とは対蹠的に異なっている。古英語においてはまだ、前置詞付き不定詞が、単純不定詞に比べ、その本来の従属性を構造上に反映させることが多かったが、近代英語では前置詞付きの形式が不定詞としての自立的機能確立し、単純不定詞はそのような発達段階を経ないまま、動詞としての意義素そのものの表出手段としての機能に局限されるようになっていく。このように時代によって二つの形式の不定詞はそれぞれその存在価値を大きく変遷させているが、上のような中英語の現象はその過渡期を象徴しているものと言える。

同じ構造に、叙述語として名詞が用いられることがある。その用例は、ことに中英語の前期では、古英語の場合同様少ないが、Chaucer からは次のような例が挙げられる。

(6) *As greet a craft is kepe wel as winne; …—Troilus and Criseyde* III. 1634 [c. 1374]. (=To keep well is as great a craft as to win.) / (7) *But men this thenken evermore, That lasse harm is…Disceyve them, than disceyved be; …—The Romaunt of the Rose* 4840—2 [a. 1366]. (=But men always think that to deceive them (*i. e.* women) is less harm than to be deceived.)

16 (ii) **述語動詞が非人称動詞の場合** 非人称動詞のあとでは不定詞がそれに密着し、その自立的機能が意識され難いため、往々単純形で表現される。しかしこれも非人称構造が人称構造に推移する以前の局部的現象であり、非人称構造が存続する場合には、不定詞はその主格的機能が明確に意識されて、前置詞付きの形式を取り勝ちとなる。Chaucer には大分この新しい傾向が現われているが、しかしまだか

なりの程度に従来の特徴も保留されている。それに対し Wycliffe 訳の聖書では、後に §§ 22, 23 で触れるように、全面的に近代的な構造が擡頭して、単純不定詞が見られなくなっている。

(1)…unnc birrþ baþe þannkenn Crist þatt itt iss brohht
till ende. —*Ormulum* 27—28 [c. 1200]. (=it befits us both to
thank Christ that it has been brought to an end.)/ (2) On
fuwuer wise us bihoueð turnen to him: on heorte, on festene,
on wope, on meninge. —*Old English Homilies* II. XII (63) [a.
1200]. (=In four ways it behoves us to turn to him (*i. e.*
God) —in heart, in fasting, in weeping, and in lamentation.)
/ (3) Me luste bet speten þane singe Of þine fule howelynge.
—*The Owl and the Nightingale*, J. 39—40 [a. 1250]. (=It
would please me better to spit than to sing of your foul
howling.)/ (4)…thogh thee lyke nat a lover be, Speke wel of
love; …—Chaucer, *The Legend of Good Women*, B, 490—1 [c.
1385]. (=though it does not please you to be a lover, speak
well of love.)/ (5) Me neded nat do lenger diligence To
winne hir love, or doon hem reverence. —*Id.*, *C. T.*, “The Wife
of Bath’s Tale” 205—6. (=It was no longer necessary for
me to exert myself to win their love or respect them.)/ (6)
…if thou no wikked word hast seyð, Thee thar nat drede
for to be biwreyd; …—*Id.*, *C. T.*, “The Maunciples Tale” 351
—2. (=if you have said no wicked word, it is not necessary
for you to dread to be betrayed.)/ (7) Hem semed han
geten hem protecciouns Agayn the swerd of winter kene and
cold.—*Id.*, *C. T.*, “The Squieres Tale” 56—7. (=They (*i. e.*
the birds) seemed to have been protected against the sword
of keen and cold winter.)

これらの例文における非人称動詞のうち、古英語以来単純不定詞を多く従えているのは、(3) の *lusten* (<OE *lystan*: cf. § 7 (6), § 9

(5) である。(1) の *birien* (<OE *gebyrian*: cf. § 7 (3), § 9 (2), § 11 (1)) とは、古英語では前置詞付き不定詞が普通であったが、中英語では逆に単純不定詞が多く用いられるようになっていく。(4) の *lyken* (<OE *gelician*: cf. § 9 (6)) は、古英語から中英語に通じて前置詞付き不定詞の方を多く従える語であり、(2) の *bihovien* (<OE *behofian*) は、古英語でもまれに前置詞付き不定詞と用いられることがあったが、この構文では主に 13 世紀から用いられており、中英語ではやはり前置詞付き不定詞の方を多く従えている。(5) の *neden* (<OE *neodian*) と (6) の *thurfen* (<OE **þurfan*; cf. G *dürfen*) とは、不定詞を従える非人称動詞としては中英語で始めて用いられた動詞であるが、前者は前置詞付き不定詞の方を単純不定詞よりも多く従え、後者は主として単純不定詞を従えている。

これらの動詞は、近代英語では語自体が廃語となるか、また語が存続しているとしても、ここに問題としている非人称動詞としての用法は廃退するか、さもなければ古風な文体に前置詞付き不定詞を伴う構造⁽¹⁾でその名残を留めている。*birien*, *lusten*, *thurfen* は廃語となっており、*lyken* (>ModE *like*) と *neden* (>ModE *need*) は人称動詞に変わり、*bihovien* (>ModE *behove*, *behoove*) は非人称動詞としての特徴を、下の § 23 に述べる (Ba'ii) 型の構造で、近代英語の文語体に伝えている。なお *neden* と *thurfen* は、非人称構造が人称化すると共に、助動詞としての性質を発揮し、特に不定詞が単純形の場合には、それと融合して、あたかも複合動詞を構成する一要素の観を呈せしめるようになる。不定詞を従える非人称動詞として、その統語史の特徴を端的に示している例と言える。

(1) 次の 19 世紀初めからの韻文の用例には、ここに述べた構造が古風な統語法として伝えられている。*They led his ambling palfrey, when at need Him listed ease his battle-steed.* —Scott, *Marmion* I. viii.

(2) ただし *thurfen* は発生的には非人称動詞から人称動詞に転じたとは言えない。OED によれば、人称構造には 'be under a necessity or obligation' の意で古英語から用いられているのに対し、非人称構造における用例は 13 世紀初めの *Ormulum* に初めて現われている。ちなみに *neden* は非人称動詞として古英語から用いられているが、単純不定詞を伴う用例はまず Chaucer のころに始まると見られ、それに対し人称動詞としての用法は 13 世紀に始まり、その単純不定詞を伴う最初の用例は、OED によれば c. 1470 年のものである。

(7) の *semen* (>ModE *seem*) は古英語の *seman* に由来するが、その原義 ‘satisfy, conciliate’ から古スカンジナビア語の *sæma* (=conform to) の影響も受けて ‘be suitable to, befit’ の意を発達させ、13 世紀初めにはその意味で不定詞（主に前置詞付き不定詞）を従えて非人称的な構文にも用いられるようになった。‘have a semblance, appear’ の意は ‘befit’ の意からの転化であるが、この新たに生じた意味では本来人称的構造をなすものであった。従って (7) の *hem semed han*…は後に人称的な *they seemed to have*…を生ぜしめた原型と見るよりは、むしろ起原的な ‘it befitted them to have…’ の意味と転義的な ‘they seemed (=appeared) to have…’ の意味との混成の跡を構造上に残した現象と見なすべきであろう。⁽¹⁾ 結果としては *semen* は §9 (7) におけるような古英語の *þyncan* (cf. G *dünken*) の機能を受け継いだことになるが、それに密接につながる不定詞には人称構造における前置詞付き不定詞に通じる補足的な従属性が潜んでいることに、注意される。

17 (a'i) **it** を形式上の主語とし、述部が「ben+叙述形容詞（または叙述名詞）」の場合 単純不定詞が *it* に呼応されるに足るだけの力をもち難いものであることは、§7 で述べたが、中英語でもこの構造の用例としては、次のようなまれなものが挙げられるだけである。

(1)…*hit were bet serve hir for noght Than with another to be wel.* —Chaucer, *The Book of the Duchesse* 844—5 [c. 1369]. (=it would be better to serve her for nothing than to be well with another.) / (2) *What worship is it agayn him take, Or on your man a werre make, …?*—Id., *The Romaunt of the Rose* 3529—30. (=What worship is it to oppose him, or to make war on your man?) / (3)…*peril was it noon to thee by-wreye, …*—Id., *Troilus and Criseyde* III. 367. (=it was no peril to reveal it to you.)

(1) Cf. OED s. v. SEEM v.²; Kenyon, *op. cit.* p. 126 ff.; W. van der Gaaf, *The Transition from the Impersonal to the Personal Construction in Middle English* §§ 29, 161—6.

(1)
 これらの Chaucer からの韻文の例で不定詞の前に to の欠けているのは韻律の影響によるものである。そのうち (1) の…bet serve…については, Skeat (*op. cit.* p. 91 b) は疑義のある箇所として “†bet” と記し, APPENDIX (p. 725) に MS.F. 以外の他の写本ではすべて “better” となっていると断わっている。いかにも…bétter sérvé…であって始めて抑揚格の韻律が成り立ち, 次行の統語上対等の位置にある前置詞付き不定詞 to be と比較しても, 納得が行くことになる。

18 (ii) 述語動詞が非人称動詞の場合 この種の構造は, 前節に扱った (Aa'i) 型に増して, 現われにくい。用例としては, birien [buri-en] (cf. § 16 (1)) を含む次の一例が引かれるだけである。

(1) Nu *hæt* iburd *breke* þas word, also me brekeð þe nute for to habbene þene curnel. —*Old English Homilies* I. VIII (79) [c. 1175]. (=Now it behoves to break these words, as one breaks the nut to get at the kernel.)

(B) 前置詞付き不定詞

19 (ai) 不定詞が「ben+叙述形容詞(または叙述(代)名詞)」のあとに置かれる場合 中英語では, 一般に問題の構造で, 前置詞付き不定詞が単純不定詞に取って代わろうとする傾向を著しく増進させているが, 表題の構造についても, § 15 に扱った (Aai) 型よりは, 比較的によくの用例が見られる。

(1)…he his uniseli ȝif him is lað to donne þis…—*Old English Homilies* I. III (31). (=he is unwise if he is loath to do this.)/ (2)…ðe is niedfull to scilden Godes temple. —*Vices and Virtues* 107.6 [c. 1200] (q. Sanders) (=it is necessary for you to defend God's temple.)/ (3) Me is leof to habbe reste And sitte stille in myne neste. —*The Owl and the Nightingale*, J. 280—1. (=It is preferable for me to have a rest and sit still in my nest.)/ (4) ‘Bet is to dyen than

(1) もっとも (2) の *Romaunt of the Rose* のこの部分は, § 15 (7) の引用箇所と共に, Fragment B に属し, Chaucer とは別の未詳の作家の手になるものとされている。

have indigence; '...—Chaucer, *C. T.*, "The Tale of the Man of Lawe" 114. (=It is better to die than to suffer indigence.) / (5) ...of swich thing were goodly for to telle. —Id., *C. T.*, "The Nonne Preetes Tale" 13. (=it would be pleasing to tell of such a thing.)

(1) の *lað* (cf. § 8 (3)) と (3) の *leaf* (cf. § 8 (2)) は古英語でも同じ構造に用いられていたが、その意味が主観的に移れば、続く不定詞は補足的な限定語としての機能を担うこととなり、人称的構造が成立する。現に近代英語では *loath*, *loth* となって、'repulsive, loathsome' の客観的で非人称的な原義がすたれ、14 世紀以来 'averse, disinclined' の意の主観的で人称的な用法を普通なものにしている。こうして *him is lað to donne* という非人称的構文から *he is loath to do* という人称的構文が発達するのであるが、この変遷の結果がかえって前置詞付き不定詞のもつ本来の従属的な機能を復原させたわけである。*leaf* の方は近代英語では *lief* で、語そのものが古語または方言となったが、新たに 14 世紀に生じた 'desirous, glad' の人称的な意味も 16 世紀以後はすたれている。しかもとの 'beloved, dear' の客観的な意味は、§ 15 で触れた *better* の場合同様、⁽¹⁾ *I had as lief [liefer] do* (cf. G *lieb haben*) のような人称的構文のうちに古文体として残存している。ここでも不定詞が単純形をなし、複合動詞の一要素に潜入していることが注意される。

一般にこの種の構造は形容詞を叙述語とする場合も、中英語の後期では *it* を表現する (Ba'i) 型に侵害されようとする萌しを見せているが、叙述語として名詞や代名詞の用いられている用例は一層珍しいものである。

(6) ...schome ow is to schuderin lengre. —*The Life of Saint Katherine* 808 [c. 1200] (q. Sanders). (=it is a shame for you to shudder any longer.) / (7) ...him nes no bot to striuen

(1) *E. g.*: *I had as lief have let it alone.* —Mrs. F. Sheridan, *Sidney Biddulph* iv [a. 1766] (q. OED).

wið þat meiden. —*Meidan Maregrete* 25.1 [c. 1250] (q. Sanders). (=it was no use for him to be at variance with that maiden.) / (8) …he wolde wepe, And rewen on him-self so pitously, That wonder was to here his fantasye. —Chaucer, *Troilus and Criseyde* v. 259—261. (=he would weep and grieve himself so piteously that it was surprising to hear his desire.) / (9) …þin is te mare strengðe to halden. —*Hali Meidenhad* 13. 10 [c. 1230] (q. Sanders). (=it is for you to hold the more strength.)

20 (ii) 述語動詞が非人称動詞の場合 この種の構造も §16 で述べた単純不定詞を用いるものよりは多いが、特に中英語の後期では非人称動詞およびその構文の衰退につれて減少するか、さもなければ it を形式上の主語とする (Ba'ii) 型の構造に取って代わられる傾向を示している。まず §16 の例に現われた非人称動詞のうち、通例単純不定詞と共に用いられた thurfen を除いて、birien [burien], bihovien, lusten, lyken, neden, semen をそれぞれ含む例を挙げる。

(1) …þe eorl …ibureþ …þat lond to leden. —*The Proverbs of Alfred* 75 [c. 1150] (q. Sanders). (=It behoves the earl to govern the land.) / (2) …þat us bihoueð to don on þrefeld wise. —*Old English Homilies* II. xi (65). (=it behoves us to do that in three ways.) / (3) Þenne lyst þe lady to loke on þe knygt, …—*Sir Gawayn & þe Grene Knygt* 941. (=Then the lady wished to see the knight.) / (4) Hem lyketh to be clene, body and goost, …—Chaucer, *C. T.*, “The Tale of the Wyf of Bathe” 97. (=They like to be clean, body and soul.) / (5) Thanne nedeth nouyte þow to take sylver for masses that þe syngen. —Langland, *Piers the Plowman*, B 282 [1377]. (=Then it is not necessary for you to take silver for masses that you sing.) / (6) Hir semed na wight to be wilde, …—*Cursor Mundi*, C. 3284 [a. 1300]. (=She seemed

not to be wild at all.)

そのほか、(6) の *semen* と同意の *thynken* (<OE *þyncean*: cf. §9 (7)) や、語義上古英語の *gewurðan* (cf. §7 (1)) と *freman* (cf. §9 (8)) にそれぞれ相当する *happen* と *availlen* を含む例を付け加えよう。

(7) For vs thought scam þe to bide, For our bodis ar now al bare. —*Cursor Mundi*, C. 868—9. (=For it seemed shameful for us to face you, because our bodies are now entirely bare.) / (8) For whan a man hath over-greet a wit, Full oft him happeth to misusen it;…—Chaucer, *C. T.*, “The Chanouns Yemannes Tale” 95—96. (=For when a man has too much wisdom, it happens, often enough, that he misuses it.) / (9) So hath your beaute fro your herte chaced Pitee, that me ne availeth not to pleyne; …—Id., *Merciles Beaute* 14—15 [a. 1396]. (=Your beauty has so driven pity out of your heart that it is useless for me to complain.)

このうち *thynken* は中英語期中に語形上、人称動詞の *thenken* (<OE *þenkan*; cf. G *denken*) を吸収したが、意味上ではかえって後者に化し、(7) におけるような非人称的機能は *semen* (>ModE *seem*) に引き継がれている。*happen* は 14 世紀に名詞の *hap* (<ON *happ* chance, good luck) から派生した動詞で、(8) におけるような *him happeth to* ~ という非人称的用法は、やがて一般の推移に従って *he happeth to* ~ という人称的用法に代えられるか、あるいは従節を用いる *it happeth that he*… の構造と合体して近代英語に伝えられている。しかしその場合でも *hap* は古語で、一般にはその派生語としてやはり 14 世紀に生じた *happenen* (>ModE *happen*) に取って代えられた。*availlen* もやはり 14 世紀にラテン語の *valere* (=be worth) を基にして造られた語で、‘be of use or advantage to, benefit’ の意の非人称動詞としては (Ba’ii) 型をなして近代英語の古文体に引き継がれている。

21 (a'i) *it* (または *that, this*) を形式上の主語とし、述部が「ben+叙述形容詞(または叙述名詞)」の場合 特に中英語の後期にあっては、主格的機能の不定詞が前置詞付きの形式で述部のあとに表現され、形式上の主語としての *hit (>it)* と呼応した構造をなすことが、目立って多くなっている。まず不定詞が叙述形容詞に従う例から挙げれば、

(1) *Hit is arfeð to understonden bute me nime þe more jeme þer-to hwu man mai hine selue forsake.* — *Old English Homilies* II. xxxii (205). (=It is difficult to understand, unless one takes the more care of it, how a man may forsake himself.) / (2) *…hit is strong to vyhte Ayeyn scþe & ayeyn rihte.* — *The Owl and the Nightingale*, J. 667—8. (=it is hard to fight against truth and right.) / (3) *Hit nere noȝt forloren For to kniȝ*ȝ*i Child Horn, Þine armes for to welde, …*—*King Horn*, C. 479—81 [c. 1260]. (=It would not be ill-timed to knight Child Horn, wielding your arms.) / (4) *So mony meruayl bi mount þer þe mon fyndeȝ, Hit were to tore for to telle of þe tenþe dole.* — *Sir Gawayn & þe Grene Knyȝ*: 718—9. (=Among the hills the man finds so many marvels that it would be too difficult to tell of the tenth part of them.) / (5) *It were ful hard by ordre for to seyn How many wonders Jesus for hem wroghte; …*—Chaucer, *C. T.*, “The Seconde Nonnes Tale” 358—9. (=It would be very hard to say in order how many wonders Jesus wrought for them.) / (6) *…“it is bettre to have a litel good with the love of god, than to have muchel good and tresour, and lese the love of his lord god.”*—*Id.*, *C. T.*, “The Tale of Melibeus” § 53. (=It is better to have a little wealth with the love of God than to have much wealth and treasure and lose the love of his Lord God.)

(1) と (5) で文頭の漠然とした事情を暗示する *hit* [it] と同格

と見なされるのは *hwu* [how] 以下の名詞節であり、前置詞付き不定詞はむしろその前の叙述形容詞 *arfeð* [hard] にかかる副詞的な機能を帯びると見る解釈は、この構文法の本質に則したものとと言える (cf. § 8 (9), § 8 (10), § 10 (9)). また (4) では叙述形容詞 *tore* に程度の副詞 *to* (=too) が付加されており、§ 10 (5) の場合同様、あとの前置詞付き不定詞は多分に *to* と相關的な副詞性を潜めていると考えられる。不定詞が主格的自立性を確立するには、それに先立ってこのような本質に根差した過渡的段階を経由しなければならないのである。

'It...to ~' すなわち (Ba') 型がいかに中英語の後期に安定しおおせたかは、聖書の 1389 年の Wycliffe 訳を Anglo-Saxon 訳に比較してみることによって明らかに知られる。次に示す Wycliffe 訳の例文のうち、(7) は Anglo-Saxon 訳で (Aai) 型に、(8) は Anglo-Saxon 訳で (Bai) 型に、(9) は Anglo-Saxon 訳で (Aaii) 型に、(10) は Anglo-Saxon 訳で (Baii) 型に、それぞれ属するものであったが、ここではすべて (Ba'ii) 型に統合されているわけである。

(7) ...; *it is good to thee for to entre gogil yȝed (=goggle-eyed) in to rewme (=realm) of God, than hauynge twey yȝen for to be sent in to helle of fier, ...—Mark ix. 47 (cf. § 6 (1)).* / (8) ...; *it is good vs to be here. —Matt. xvii. 4 (cf. § 8 (6)).* / (9) ...Pharisees ..axiden him, *If it be leefful (=permissible) to a man for to leeue his wyf?—Mark x. 2 (cf. § 7 (2)).* / (10) *Is it leefful for to ȝyue tribute to Cesar?—Mark xii. 14 (cf. § 9 (1)).*

次に叙述語として名詞（または形容詞+名詞）が用いられている例を挙げる。

(11) ...*neoðeles min unwil hit is to don al þat...*—*Sainte Marherete* 13.3 [c. 1200] (q. Sanders). (=it is nevertheless against my will to do all that.) / (12) ...*hit is me to muchel iswinch ðar embe to þenken oðer to speken. —Vices and Virtues* 47.4 (q. Sanders). (=it is too great a task for me to think

or speak about it.) / (13) …somme seyden that *it* was Wonder to maken of fern-asshen glas, …—Chaucer, *C. T.*, “The Squieres Tale” 253—4. (=some said that it was wonderful to make glass out of fern-ashes.) / (14) *It* is a sinne and eek a greet folye *To apeiren* any man, or him *diffrage*, And eek *to bringen* wyves in swich fame. —Id., *C. T.*, “The Milleres Tale” 38—40. (=It is a sin and also a great folly to impair or dishonour any man, and also to bring women into such notoriety.)

(12) の *hit*…*to* (=too)…*to*…*to*…*to*…の現象については、上の(4)の場合と同じことが言われうる。また(13)の *wonder* を叙述語としていたる表現は、§19(8)と比較されるべきである。

古英語にも相当した現象 (cf. §10(7)(8)(11)) が見られたが、この種の構文において形式上の主語の *it* がもっと具体的な指示力をもつ *that* (<OE *þæt*) に代えられることがある。‘*It*…*to*…’の型が固定して来ると、*it* はあたかもあとの前置詞付き不定詞の自立性を補佐する支柱のように感ぜられるが、*that* の使用はそのような抽象的形式化に陥ることのないこの構文法本来の具象性を象徴している。またまれに *this* も同じ位置に用いられることがあるが、あとの不定詞の追叙的性格を一層明瞭にする力が込められている。

(15) ‘*þæt* is…*eche* life *to seon* and *cnawen* soð *Godd*, ant *him þæt* he sende *Jhesu Crist*, ure *laverd*, *to ure alesnesse*’ …—*Sawles Warde* 7—9 [a. 1240] (q. Mossé)⁽¹⁾. (=It is an eternal life to see and know true God, and our Lord Jesus Christ whom He sent to our deliverance.) / (16) …*that* is nat *myn entente*…*for to repente* me, For any thing that I have had of thee;…—Chaucer, *C. T.*, “The Freres Tale” 332—4. (=it is not my intention to repent for anything that I have

(1) Mossé, *Manuel de l'anglais du moyen âge* (II. I. p. 181) による。

taken from you.) / (17) For *this* was ontrelly his fulle entente
To sleen hem bothe, and never *to repente*. —Id., *C. T.*, “The
 Pardoners Tale” 521—2. (=For it was entirely his full
 intention to kill them both, and never to repent.)

22 (ii) 述語動詞が非人称動詞の場合 非人称動詞およびその用法が局限され衰退して来ているとは言え、まだその変化の過渡期にあり、また “it…to ~” 型の確立しつつある中英語では、この構造の用例も古英語の場合 (cf. § 11) に比べれば増大している。

(1) Nu bi-cumeð *hit* þerfore to uwilche cristene monne
 mucheles þe mare *to halizen* and *to worþren* þenne dei þe is
 icleped sunne-dei. —*Old English Homilies* I. iv (45). (=Now
 it becomes each Christian man so much the more to hallow
 and honour the day that is called Sunday.) / (2) Lyketh *it*
 yow *to witen* …how longe tyme agoon That ye me lafte in
 aspre peynes smerte, …!—Chaucer, *Troilus and Criseyde* v.
 1324—6. (=Do you like to know how long you have left me
 in bitter smart pains?) / (3) *It* nedeth nought *to pyne* yow
 with the corde. —Id., *C. T.*, “The Knightes Tale” 888. (=It
 is not necessary to torture you with the cord.) / (4) …yif *it*
 seme a fair thing, a man *to han* encrested and spred his
 name, than folweth *it* that *it* is demed to ben a foul thing,
 yif *it* ne be y-sprad and encrested. —Id., *Boethius* III. Prose
 vi. 19—23 [c. 1374]. (=if it seems a fair thing that a man
 has increased and spread his reputation, then it follows
 that it is considered a foul thing, if it is not spread and
 increased.) / (5) Me thinketh *it* acordaunt to resoun, *To telle*
 yow al the condicioun Of ech of hem, …—Id., *C. T.*, Prolog.
 37—39. (=It seems to me reasonable to tell you all the
 condition of each of them.) / (6) …with that word *it* happed
 him, par cas, *To take* the botel ther the poyson was, …—

Id., *C. T.*, "The Pardoners Tale" 557—8. (=with that word he happened, by chance, to take the bottle which contained the poison.) / (7) … "bette it is and more *it* availleth a man to have a gode name, than for to have grete riches." —Id., *C. T.*, "The Tale of Melibeus" § 52. (=it is better and more useful for a man to have a good name than to have great wealth.)

(1) の *bicumen* は 'befit' の意であるが、12 世紀に生じたこの用法も近代英語ではすたれて、今日では現在分詞形の形容詞による 'it is *becoming* to someone to do' の形式に代えられている。(2) 以下 (7) までの用例は、それぞれ § 20 の (4) から (9) までのものの含む非人称動詞を定形動詞としているものである。"It…to～" 型が非人称動詞の構文にもいかに浸透しているかが、これらの例証によって測り知られよう。なお (1) で非人称動詞に従的に付加される人を示す本来与格の名詞が *to uwilche cristene monne* と前置詞 *to* による分析的形式で表わされているのは、新しい表現法を象徴している。注意されるのは、(4) で人を示す名詞 *a man* が非人称動詞 *seme* から明確に離れた位置に表現されていることである。これも発生的には、(7) における *a man* と同様、与格で *seme* に意味上つながるものであったが、ここではむしろあとの不定詞 *to han…* に密着させられている。結果としては、特に中英語期にラテン語の影響で発達した不定詞付き対格 (Accusative with infinitive) の構造をなしており、*a man* はあとに続く *to han…* に対し意味上主語としての関係を示すようになっているものである。この構造は近代英語では一般に *for* に先立たれる形式か、さもなければさらに論理的な従節の構造に取って代えられている。

また聖書の Anglo-Saxon 訳との対比上、Wycliffe 訳の例を挙げれば、

(8) Hou therefore shulen the scripturis be fulfillid? for so *it* behoueth to be done. —*Matt.* xxvi. 54 (cf. § 11 (1)). / (9)

ȝif the cause (=case) of a man with a wijf is so, it speedith nat to wedde. —*Matt.* xix. 10 (cf. 9 (8)).

(8) では、非人称動詞が Anglo-Saxon 訳の *gebyrian* から *behouen* (>*behoen*) に代えられているが、同じ (Ba'ii) 型は保持されている。しかし Anglo-Saxon 訳で他の構造の (Aaii) 型をなす *Matt.* xviii. 33 (cf. §7 (3)) や (Baii) 型をなす *John* ix. 4 (cf. §9 (2)) も、Wycliffe 訳では上の (8) と同じく、*behouen* を用いた (Ba'ii) 型に代わっている。(9) は Anglo-Saxon 訳で (Baii) 型をなしたものがやはり (Ba'ii) 型となって現われているものである。非人称動詞も *freman* から *speden* (<OE *spedan* *succeed, prosper*; cf. Mod E *speed*) に代わっている。*speden* は Wycliffe のころから 'be profitable or useful' の意でこの種の構造に用いられ始めたが、その用法は 15 世紀のうちに廃用となっている。

23 (b) 不定詞が述語動詞に先立つ場合 不定詞がみずから述語動詞の前に立ちうるというのは、その本来の従属的な副詞性から脱却し、主格的機能は無拘束に発揮しうるようになった証拠と言える。古英語ではほとんどその用例は見られなかった (cf. §12) が、中英語では文脈上の強調や韻律の関係はあるにせよ、とにかく下のような用例が挙げられるようになっている。なおこの用法が、通例自立的な名詞性を発達させていない単純不定詞には見られないということも、当然である。

(1) *To seche hyne is lyhtlych þing.* —*The Owl and the Nightingale*, J. 1759. (=To seek him is an easy thing.)/(2) ...*to blam þe broiþer was þam laith*...—*Cursor Mundi*, C. 1102. (=to blame the brother was hateful to them.)/(3) *Such a sowme he þer slowe bi þat þe sunne heldet, Of dos and of oþer dere, to deme were wonder.* —*Sir Gawayn & þe Grene Knyȝt*: 1321—2. (=How many does and other animals he had killed there by the time the sun set, it would be wonderful to judge.)/(4) *He seith that to be wedded is no*

sinne;…—Chaucer, *C. T.*, “The Tale of the Wyf of Bathe” 51. (=He says that to be married is no sin.)/(5) *To liven in delyt was ever his wone*, …—Id., *C. T.*, Prol. 335. (=To live in delight was always his habit.)/(6) *To telle all wolde passen any bible That o-wher is*;…—Id., *C. T.*, “The Chounous Yemannes Tale” 304—5. (=To tell all would pass any book in the world.)

このうち (1) から (5) までは、すべて不定詞に続く述部は「be+叙述語」をなしているが、(6) では叙述動詞として一般の動詞が用いられている。主語としての不定詞の用法に一つの新局面を開いた例と言える。

なお Chaucer には、一旦前置詞付き不定詞で文を始め、改めてそれを受けて *it* を述語動詞の前に表現している例が見られる。構造上 (Ba') 型の要素が混入したものであるが、*it* は韻律上の必要から用いられて、不定詞句を一層浮き立たせると同時に、全体の文勢に適度な抑揚を添える効果をもっている。

(7) *To been avysed greet wisdom it were*, Er that he dide a man a dishonour. —Id., *C. T.*, “The Pardoners Tale” 362—3. (=It would be very wise to be cautious, before he did you a dishonour.)/(8) *Ne me to love, a wonder is it nought*; …—Id., *Troilus and Criseyde* II. 743. (=It is no wonder at all to love me.)

(II) 名詞的主格叙述語

24 不定詞が主語としての自立性を確立して述語動詞の前にも自由に立ちうるようになるにつれて、当然それが *be* などのあとの位置に、機能上主語と対等な名詞的叙述語となる性能も発達する。§13 に述べたように、古英語では、主語としての不定詞との意味上の識別が困難であるということもあったが、この用法の例はまれにしか見られなかった。この種の機能は、英語の構文法の一般にわたって分析化が完遂

し、語順が確立されて来ると同時に、自然に醸成されるものであるが、この場合 (Bb) 型構造の発達とほぼ平行して、中英語の後期に盛んになっている。

(1) …*þu*…*tellest þat*…*al my reorde is wonyng And to there gryglych þing.* —*The Owl and the Nightingale*, J. 309—12. (=you say that all my speech is wailing and to hear grisly things.) / (2) …*mi mester is to don riht and riht fon*… —*Sawles Warde* 536 (q. Sanders). (=my business is to do right and find right.) / (3) *The firste vertue…Is to restreyne and kepe wel thy tonge.* —Chaucer, *C. T.*, “The Maunciples Tale” 332—3. (=The first virtue is to restrain and keep well your tongue.) / (4) …*sinne is*…*al that men coveiten agayn the lawe of Jesu Crist; and this is for to sinne in herte, in mouth, and in dede,* …—*Id.*, *C. T.*, “The Persones Tale” 959. (=sin is all that men covet against the law of Jesus Christ, and this is to sin in heart, in mouth, and in deed.) / (5) …*to love god is for to love that he loveth, and hate that he hateth.* —*Ibid.* 307. (=to love God is to love what He loves and to hate what He hates.)

(5) で主語にも同様な前置詞付き不定詞が用いられており、形式上整然とした対句的陳述文を構成している。不定詞のこの用法は論理的思考を反映し、主格的機能の表現法としても、かなり近代的発達の様相を帯びたものである。

IV 結 語

25 以上筆者は中英語期末に至る英語の不定詞につき、その主格的機能の発達の様相を関係の諸構造に着目しながら通観した。本来一種の名詞の固定した斜格形に由来する不定詞は単純形では動詞の意義素の表出手段として存続したが、明析な従属的機能単位であるべき前置詞付き不定詞は新たに名詞相当の統語的価値を獲得した。この過程は

漸進的ではあるが、古英語と中英語との二つの時期を対照して最も注目される変遷は、単純不定詞の自立的名詞性の喪失と前置詞付き不定詞の主格的地位への擡頭である。要するに、主格的不定詞の発達の動向は具象的な非人称的構文法から抽象的な論理的構文法への推移である。単純不定詞は具象的構文法のうちにその過剰分野を見出したが、前置詞付き不定詞は、絶えず本質的特性を潜めながら、論理的構文の要素としての地位を確立しようとしたのである。

前置詞付き不定詞のこの進出はほぼ Chaucer の英語をもってその目的点に到達したと言える。しかし現代英語の現象から見れば、それはまだ不定詞の歴史の過渡期に過ぎない。近代にはいって、主格的不定詞がどのような歩みを続けて来ているか、筆者は改めてこれを観察する機会をもちたいと思う。